

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	施用の目安等
有機質資材 施用技術	<p>○<b>たい肥等有機質資材施用技術</b>            土壌診断に基づき、適切に完熟たい肥等を施用する。</p>	たい肥 1 ～ 2 t /10a
化学肥料 低減技術	<p>○<b>局所施肥技術</b>            局所施肥（土耕養液栽培等）により肥効率を向上させる。</p> <p>○<b>肥効調節型肥料施用技術</b>            被覆肥料等の利用により肥効率を向上させる。</p> <p>○<b>有機質肥料施用技術</b>            有機質肥料を用いた施肥体系とする。</p>	化学合成窒素量 ・秋ぎく 13.4kg/10a 以内 ・秋ぎく（2度切り） 14.6kg/10a 以内 ・夏ぎく 9.0kg/10a 以内
化学農薬 低減技術	<p>○<b>機械除草技術</b>            除草機械により雑草（施設周辺での害虫発生助長）を駆除する。</p> <p>○<b>生物農薬利用技術</b>            生物由来の有効成分である農薬の利用により病害虫を駆除する。            ・生物農薬：B T 剤（ハモントリ、オカゴカ）など</p> <p>○<b>抵抗性品種栽培技術</b>            土壌病害虫等の耐病性品種の栽培により病気等の発生を抑制する。</p> <p>○<b>土壌還元消毒技術（施設）</b>            土壌中の酸素濃度を低下させることにより土壌病害虫を駆除する。</p> <p>○<b>熱利用土壌消毒技術（施設）</b>            蒸気、太陽熱などの利用により土壌病害虫を駆除する。</p> <p>○<b>光利用技術</b>            色彩粘着板利用により害虫を捕殺する。            黄色蛍光灯、光反射資材利用により害虫の活動抑止や忌避させる。</p> <p>○<b>被覆栽培技術</b>            被覆資材により有害動植物の付着を防止する。            ・防虫ネット（開口部被覆）（アブラムシ類・ハモントリ・アザミヤカ類など）</p> <p>○<b>フェロモン剤利用技術</b>            フェロモン剤の利用により害虫の大量誘殺や交信を攪乱させる。            ・リトルア剤（ハモントリ）、ダイアモルア剤（オカゴカ）など</p> <p>○<b>マルチ栽培技術</b>            紫外線反射マルチ、稲わら等利用により有害動植物のまん延防止する。</p>	化学合成農薬成分回数 ・秋ぎく、夏ぎく 12 成分以内 ・秋ぎく（2度切り） 22 成分以内
<p>その他の留意事項</p> <p>有機質肥料、石灰質肥料等は早めに施用、混和する。</p> <p>有機質資材施用で肥料効果が期待できる時は減肥する。また、土壌分析により施肥量を調節する。</p> <p>収穫後の残さは適切に処分する。</p>		